

## 平成 30 年度第 1 回地域安全まちづくり審議会 議事録概要

- 1 日時 平成 30 年 9 月 6 日 (木) 13:30～15:30
- 2 場所 ラッセホール 地下 1 階リリー
- 3 出席者 委員：山下会長、大岡委員、岡本委員、坂本委員、佐々木委員、田村委員、遠山委員 (代理：兵庫県町村会横山次長)、前田(稔)委員、水谷委員、米田委員  
県：松森女性生活部長、橋本県民生活局長、小藤地域安全課長ほか幹事課室

### 4 内容

- (1) 諮問 地域安全まちづくり条例第 1 2 条第 2 項の規定により、推進計画 (第 5 期) を定めるため諮問

- (2) 議事 地域安全まちづくり推進計画 (第 5 期) の策定について

(事務局)

資料 1～6 に基づき説明

(A 委員)

- ・ 地域がそんなに活力が弱っているとは私は思わない。安全について地域の目は育ってきている。
- ・ 子どもを守る 110 番の家は、家の人働きに出ていて、女性の社会進出が進んできたので、昼間は家にいない状況はある。
- ・ 子どもに対する防犯講座は、最近では、お巡りさんが来て話をするだけではなくて、子どもを育てるという目線で、子供たち自身が被害に遭わないよう、自分の身は自分で守れるように育てていく講座の取り組みが進んでいる。

(B 委員)

- ・ 兵庫県は広いので地域的な違いも大きい。地域によって、まちづくり防犯グループの活動のあり方も違うし、元気なところとそうでないところもあるかもしれない。兵庫県全部を見てこうだという取り組みではなく、もう少しきめの細かい支援策が要るのではないか。
- ・ 子どもを守る 110 番の家・店についても、学校とうまく連携しているところとできていないところ、「110 番の店」が結構ある地域とそうでない地域、などがある。その辺りを見極めていかないといけない。機能していないという地域もあるので、そういうところはどうするかという、もう一步踏み込んだ見方、支援がいる。

(C委員)

- ・ 子どもを守る 110 番の家・店に関して、店舗なら、朝、お店を開けるときに、子どもの目線になるカラーコーンに子ども 110 番を貼って出し、夜になればしまう、ということをしているところがある。掲示物を出すという動きのある形にした方が、子どもたちも目につき、いざという時の子どもの逃げ場所になる。

(B委員)

- ・ 子どもを守る 110 番の家は、お願いしっ放しではなくて、できる限り頻繁にいろんな働きかけをし、子どもにも認知してもらう取り組みが必要である。

(A委員)

- ・ 防犯協会会員証を配布するのにも、説明書をつけて1戸ずつ配布をすると、玄関に貼ってもらえる。どんなわかりきったことでも、きちんと丁寧にすることが重要である。

(D委員)

- ・ 子どもたちとのコミュニケーションが大事だと思う。知らない子が通っていても、ランドセルを持っていると、私の方から必ずおかえりなさいとか、こんにちとはと声掛けすることを常に心掛けている。子どもが言わないから大人も言わないのではなくて、子どもたちには大人の方から声を掛けることが必要である。

(E委員)

- ・ 安心して安全に暮らせるまちづくりにとって一番必要なことは、みんなが地域に関心を持つことだと思う。今、あちこちで、子育てに関するNPOや、お母さんたちの団体などが組織化されており、子育てを通じて地域に対する関心を高めるという一つの方向もある。行政の主体的な取り組みだけではなく、NPOや地域の団体との協働で、地域への関心を高めていく取り組みである。そういった活動している人達は予算が少ないので、財政、人材の派遣、紹介を含めて、団体の活動を支える行政のバックアップの体制が必要である。意識が高い団体等に対して、どんな観点からサポートしていけばいいか、財政なのか、人なのか、情報なのか、もう少し精査してもいいのではないかな。
- ・ 子どもへの声掛けについて、子どもには危険な声掛けとやさしい見守りの声掛けの区別はおそらくわからないと思う。学校の中で、地域の人たちとの顔の見える関係をどうやって作るのか、は大事なことである。一方で、子ども自身が危害から逃れるための手段として、例えば、後ろから声を掛けられ

た、手をつかまれた時はどうするか、など具体的なトレーニングの機会、学びの機会は、学校でしか用意できない。そのような活動を積極的にしているNPOもあるので、学校と協力し合うということは考えられる。

- ・再犯防止について、必須なのは、福祉の関係者との協力と、自治体がどのような観点から地域の人にアピールするか。再犯防止だけを強調してしまうと、そんな危ない人はうちの地域は要りませんという話になるので、再犯者の実像を伝えることが大事である。もう一回生き直しができる、やり直しができるチャンスをつくる、地域がその支えをする、そういった意識を高めていくことは、地域の安全安心の力を高めていくことになるので、自治体が地域の人にきちんとメッセージを伝えていくことが重要である。

#### (B委員)

- ・次期計画には、犯罪被害者支援と再犯防止を地域安全の計画の中に行動の柱としてそれぞれ立てるということだが、地域安全まちづくりの取り組みと、犯罪被害者支援や再犯防止の取り組みは、めざすところは一つだというところを考えないといけない。

#### (F委員)

- ・地域の担い手については、高齢化が進んでいて、次世代がどうやって担っていくのが課題。高齢者に続く世代がなく、次は子供を中心に繋がっているので、それがPTAになるのだが、なかなかそこに繋がらない。ただ、PTA役員が子どもを通じた繋がりの中で、少しずつ移ってくることもできているので、PTAをうまく地域に繋げていくことが必要である。

#### (G委員)

- ・犯罪被害者等の支援の充実について、性犯罪が顕在化することで増加しているのは事実だが、犯罪被害者と言ったときに、忘れられがちなのが、性犯とか凶悪犯だけではなくて、交通事犯も多いことである。交通事犯については、これらの犯罪の何倍もあるという実情があり、犯罪被害者等にそれも含むということであれば忘れずに入れ、犯罪類型の明確化をしておく方が、いろいろな犯罪に遭われた方を対象にしていることになってよい。
- ・犯罪被害者等への支援に対する支援を再犯防止の推進と並べてみると、バランスが悪い状況にある。再犯防止の推進では、加害者の社会復帰への支援が盛り込まれているが、犯罪被害者にも社会復帰への支援が必要である。犯罪被害者等の支援に対する理解促進のところに、例えば休暇制度を入れることによって、職場に犯罪被害者のことをよく知ってもらい、もしも犯罪にあったら休暇も取って、また社会復帰してもらおうというメッセージになる。こ

ういった支援を文言として入れておくことも必要である。

- ・ 「二次的被害」という言葉が遣われているが、学術的には「二次被害」という言葉に訂正されている途上にある。国は「二次的被害」を第一次犯罪被害者等基本計画から使っているが、自治体の条例等でも「二次被害」に変わってきている。兵庫県でも「二次被害」に訂正してもらいたい。
- ・ 再犯防止対策の推進について、福祉支援に「地域生活定着支援事業」とある。おそらく地域定着支援センターを意図しているものと思うが、地域、福祉のいろんな機関を巻き込んでいくところが重要課題になってくるので、広くいろいろな機関が関わるような書き方にしてもらおうとよい。
- ・ 加害者のバックグラウンドを考えた時に、非常に生活環境が悪い、幼少時からのトラウマを抱えている、といった問題がどうしても根深くある。こういった問題まで踏み込んでいくとなると、例えばDV、児童虐待、障害者虐待等を、地域安全とどう絡めていくのかというところは、一度検討してもらおう余地はあると思う。

(H委員)

- ・ 無償のボランティアに頼っているところがかかなり多く、それで担い手が減ってきているという問題もある。無償のままとするのか、ある程度の経費を出して、参加者を少し増やすことができないのか、とも考えられる。
- ・ 子どもを守る 110 番の家は、看板だけあって役に立たないならば、子どもは一体どこに逃げ込めばいいのかわからないということになるので、110 番の家の更新をもう少し考える必要がある。

(B委員)

- ・ 「子どもを守る 110 番の家」については、頼みっぱなしのところもあれば、こまめに子ども達が尋ねていく、挨拶に行くことをやっているところもある。差がありすぎ、同じように評価するというのは違うのではないか。マニュアル化して一律とするのがいいのかどうか。地域によってそれぞれふさわしい形態を考えてもらい、そのための後押しをするのがいいのでは。

(I委員)

- ・ 成果指標を刑法犯認知件数全体ではなくて、特定の罪種の指標にするのは大変よい。振り込め詐欺は法的或いは技術的な壁があって、なかなか犯人が捕まらない。それなりの人数は捕まえているのだろうが、中枢の人間を捕まえていない。中枢部にいる犯人は全然リスクもないという犯罪である。振り込め詐欺を抑え込むというのは、まさに地域の防犯力が問われるので、こういう指標はよいのではないか。

- また、性犯罪の強制わいせつとか、その前段階であることが多い声掛けなどの指標もあった方がよいのではないか。振り込め詐欺とは全く異なり、犯人は捕まるとわかっているにもかかわらず犯行を抑えきれないところがあって、検挙の威嚇力が効かない犯罪である。こういったものも地域の防犯力を問われる指標かと考える。
- 元気な高齢者が地域の防犯活動に思ったほど参画してくれないとの報告があったが、人生の経験積んでいるから、社会性が高まるかということ、そうでもなく、孤立するという人も結構いるのではないか。体は元気だけれど、1人の方がいいという方も結構いると思う。この辺りをどうすれば参加していただけるのかというのが悩ましいところである。

(E 委員)

- 地域の中で保守文化財や歴史があるなど、いろんな形で地域に関心を持つと、その繋がりの中で、自分たちが暮らしているところを人に知ってもらおうと思い、その地域を大事にしたくなる。安全でその文化や歴史や人の暮らしが守られるというところと何か知恵を出して結びつけると、ベテランの人たちは少し関心を持つのではないか。

(B 委員)

- 犯罪被害者等支援と再犯防止が大きな柱として次期計画に付け加わるが、これに関する成果指標は特にいらないのか。活動指標で十分なのか。成果指標として何か新しいものを考えるべきかどうか、一つ論点にならないのか。

(事務局)

- 犯罪被害者等支援と再犯防止も地域の安全に繋がっていくので、刑法犯認知件数や体感治安ということで、大きくはいいのではないかと考えており、活動指標の方で設ければと考えている。

(J 委員)

- 子どもへの声かけに関して、災害の避難訓練時などに、家族でボランティアの皆さんとの顔合わせの機会をつくってはどうか。
- 事業所の参加が少ないということだが、事業所も巻き込んだ仕掛けであれば、事業所も地域安全に協力していることでPRにもなってお互いによい。
- ふれあいパトロールという若い人がランニングしながら、パトロールをするという取り組みがあるが、このように楽しみながら防犯にも役立つことを広げていけるとよい。